

# 『古今和歌集』の構造と配列

——恋の部を中心に——

谷 崎 たまき

日本で最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』編纂の成功は、後の『後撰和歌集』や『拾遺和歌集』など、多くの勅撰和歌集の編纂を促した。選者たちはどのような意識のもとで和歌の組織化を行ったのか。どのような秩序を持って歌を各巻に収め、並べたのだろうか。構造論・配列論はこのような問題意識のもとで展開される。だが、構造論と配列論の区別は曖昧になりがちである。確かに配列論は構造論と切り離せるものではなく、むしろ構造論の一部を成すものである。ここでは、部立てや巻がどのように組織されているか、巨視的に捉えて分析し論じること「構造論」、部立てや巻、歌がなぜこのような順番に配置されたか、構造を微視的に捉え、その並ぶ順番に注目して分析し論じること「配列論」とする。

## 二

恋の部は、巻一一の恋歌一から巻一五の恋歌五までの五巻で成立している。この五巻の構造について、久曾神昇氏は、恋歌一を「慕ひそめる恋」、恋歌二を「親しくなる恋」、恋歌三を「会ふ恋」、恋

歌四を「別れて後の恋」、恋歌五を「離れ行く恋」として、各巻が主題を持ち、主題に合った歌が集合・配列されていると述べている。この他にも、恋愛のプロセスに従った集合・配列という論に、恋歌五巻が時間的系列において秩序立てて配列されているという松田武夫氏の論がある<sup>(2)</sup>。恋歌一・恋歌二は恋愛初期段階の「不会恋」における忍ぶ恋の歌を、また、恋歌三と恋歌四の前半までは、恋歌三の「相会ふ夜」を恋愛成就の頂点とし、恋歌四では恋心の高まりが徐々に冷却に向かうという「会恋」における歌を、恋歌四の後半と恋歌五では、冷却に向かった恋愛感情が破綻し、恋愛とは諦観に終わるものだと帰結する恋愛後期の「会不会恋」における歌を、恋愛の時間的系列を基準とした分類や、一首中に詠み込まれた事物を中心に分類し、類歌の意識的な集中配列法によって組織立てられているとする。また、部分的に詠者や出典としての歌合などが分類基準となる箇所も見られ、複雑に組織立てられていることも指摘している。恋の部が時間の推移に沿って構成され、類歌の意識的な集中配列法がなされているという松田氏の論は多くの研究者から賛同を得ており、現在の通説となっている。だが一方で、恋歌四を前後に二分することは巻のまとまりを無視しており適切ではないという指摘や、

必ずしも時間的推移によつた構造ではない、一直線上の時間的推移にならつてゐるかは疑問が残る、恋愛成就期を境に成就前、成就後と分ける構造分析は、そのように読もうとすれば「それも可能」であるだけで、必ずしもそうとはいえない、などの指摘もされている。<sup>3)</sup>

新井栄蔵氏は、恋部五巻は恋歌一から五へと一直線上の構造を有するのでなく、巻頭末歌の詠者に対応関係が見られる点や、巻ごとに作者名の附される歌と作者未詳の歌の集中的・連続的構造と分散的・断続的構造という対応関係が認められるとして、恋歌一から恋歌四の四巻と、それに付加的に添えられた恋歌五という二部で構成されていると論じている。<sup>4)</sup> また、鈴木宏子氏は、恋の部は時間的系列に、恋愛のプロセスに沿つて配列されているという通説を認めながらも、恋歌一から五までが一直線上ではなく、恋歌一から四と恋歌五の二部構造であるとされている。<sup>5)</sup> 他にも、吉川栄治氏は恋の部の構造を『万葉集』と比較して歌の作者名が附される歌と作者未詳の歌の「集中排列、対置構造の量的、序列的照応性」が認められると指摘する。また、心象表現に着眼し、恋歌一から五のうち「恋」と「思（物思）」の使用語数は、恋歌一・二の前半部分では恋歌三以下の巻に比べて心象表現が多く用いられているとして、規範的歌巻としての恋歌一・二と、時間的展開の中に恋愛の実像を投入した拾遺的歌巻としての恋歌三・四・五という二部構造で成り立つてしていると結論付けている。<sup>6)</sup>

恋の部五巻がそれぞれどのように組織立てられたのかを見てみると、やはり恋歌一・二は恋歌三以降とは違い、歌の作者による分類が行われていたことが明確である。恋歌一は撰者時代の歌が前半に集中して並び、それ以降の約七〇首は全て作者未詳の歌が並んでい

る。恋歌二は六歌仙の一人である小野小町の三首から始まり、その後は撰者時代の歌が並んでいる。中でも撰者である紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人の歌は多く収載されており、その数は恋歌二の六十四首中三十八首と半数以上を占めている。このように恋歌一・二においては、歌の作者、作者名の有無にはつきりとした特徴が表れている。これは、撰者が恋歌一・二を編纂する際に、意識的に作者の有無を区別し、作者を時代ごとに分類して組織立てたのだと考えられる。だが、恋歌三以降ではそのような作者による分類はなされておらず、作者の分類による恋歌一・二と、作者の区分のない恋歌三・四・五といった構造になっていることがわかる。

また、恋という部立ての中で、それを機械的に一から五まで分けたのはなぜだろうか。歌の数が多いため便宜上、ということもあるだろうが、そうであるならなぜ数ある歌の中でその部分を区切りとしたのかだろうか。それぞれの巻の冒頭は、巻の切り替わる展開部分として重要な歌となると考える。よつて、各巻の冒頭歌三首を比較してみたい。

#### 恋歌一

題知らず

よみ人知らず

ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな  
(四六九)

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし

(四七〇)

紀貫之

吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし (四七一)

恋歌二

題知らず

小野小町

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを (五五二)

(五五二)

うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき (五五三)

(五五三)

いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る (五五四)

(五五四)

恋歌三

弥生のついたちより、忍びに人にもら言ひて後に、

雨のそほ降りけるに、よみてつかはしける 在原業平朝臣

起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめくらしつ (六一六)

(六一六)

業平朝臣の家にはべりける女のもとに、よみてつ

かはしける

敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れてあふよしもなし (六一七)

(六一七)

かの女に代りて返しによめる

業平朝臣

浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ (六一八)

(六一八)

恋歌四

題知らず

よみ人知らず

陸奥の安積の沼の花かつみかつみる人に恋ひやわたらむ (六七七)

(六七七)

あひ見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人を聞くべかりける (六七八)

(六七八)

石上ふるの中道なかなかに見ずは恋しと思はましやは (六七九)

(六七九)

貫之

恋歌五

五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意には

あらで、もの言ひわたりけるを、睦月の十日あま

りになむ、ほかへかくれにける。あり所は聞きけ

れど、えもの言はで、またの年の春、梅の花ざ

かりに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひて、

かの西の対に行きて、月のかたぶくまで、あばら

なる板敷にふせりてよめる 在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして (七四七)

(七四七)

題知らず

藤原仲平朝臣

花薄われこそ下に思ひしか穂に出でて人に結ばれにけり

(七四八)

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれそめけむ  
藤原兼輔朝臣

(七四九)

以上が恋歌一から五までの冒頭歌の三首である。恋歌一の冒頭三首は、理屈ではどうにもならぬ恋の本質を詠んだ巻頭歌に、「音にのみ聞く」と、噂でのみ聞いている恋愛初期の歌、恋の始まりを自覚する歌が並んでいる。恋歌二の冒頭三首は全て「夢」を詠んだ小野小町による歌で、恋しい人に会いたい、夢でもいいから一目見たいという恋しい人への情熱的な思いが詠まれている。恋歌三の冒頭三首は、いずれも『伊勢物語』に載る歌である。六一六番歌は二段、六一七・六一八番歌は一〇七段に見られる。詞書からわかるように、

六一六番歌は密かに恋人と会った後に恋人に贈った歌で、六一七・六一八番歌は敏行朝臣が業平の家にいる恋人に贈った歌と、女性に代わって業平が返した歌の贈答歌となっている。この二首は恋歌一・二の歌とは違い、恋人に贈る歌、すなわち恋が成就し男女関係が成立している時の歌である。恋歌四の冒頭三首では、六七七番歌はそれまでの会いたい気持ち成就し、会うようになりながらも、ずっと恋し続けるであろうという心情が詠まれている。六七七・六七八番歌は逢わずにいれば、むしろこんな恋しいと思わずに楽だったと、恋人への思いが募り苦しいという気持ちが詠まれている。三

首はいずれも成就してもなお恋しく思う心が詠まれ、六七七・六七八番歌ではそこに苦しみさえも読み取れる。恋歌五は、『伊勢物語』の四段に載る歌が巻頭に置かれている。自分以外の全てが変わってしまい、取り残されたかのような孤独感を詠んだ歌で、五条の后が入内してしまい、手の届かない人となってしまった業平の嘆きが読み取れる。次の七四七番歌は、密かに思いを寄せていた人が他の人と結ばれてしまったことを嘆く歌で、『伊勢集』においては、仲平が、伊勢と兄の時平が結ばれたことを嘆いた歌として収載されている。七五〇番歌は、「よそにのみ聞かましものを」「みなれそめけむ」とあり、恋人に対する慣れ、馴染みが詠まれた歌である。こうしてみると、恋歌五の冒頭三首は成就してなお恋に苦しむ恋歌四とは打って変わり、恋が終わってしまったことを嘆く歌や、成就しなかった恋を嘆く歌、恋のときめきがなくなり、恋人に慣れはじめてしまった歌が詠まれ、恋歌一から続いた恋に思い悩む歌から一転し、恋の終わりを迎えた歌が並んでいる。

各巻の冒頭三首を見比べてみると、このような恋愛のプロセスが見えてくる。選者たちは恋歌一から五までの五巻を通して段階的に恋愛の始まりから終わりまでを表し、巻が進むごとに恋愛が進展していく構造となっていると考えられる。よって、恋の部の構造は、作者の有無による分類と作者の時代による分類が行われた恋歌一・二とそれ以外の三から五という構造と、巻が進むごとに恋愛が進展し、始まりから終わりまでを表した一から五までという二重の意識のもとで組織された構造になっていると考えられる。

具体的な配列の方法については、松田氏の類歌の意識的な集中配列法の他に、直前の和歌に反発し異を唱えたり、同調して賛同したり、あるいは贈答的、物語的な部分や、ことば遊びの要素も見受けられる配列が施されていると指摘する片桐洋一氏の論や、一首の歌が複数の歌に作用するような建築的な配列がなされていると指摘する石田讓二氏の論<sup>8)</sup>、本来贈答歌ではない二首を贈答歌のように並べた贈答的配列を指摘する奥村恒哉氏、佐藤和喜氏の論、同様の比喩を用いた歌を近くに並べ、一首一首が孤立しない配列を指摘する小沢正夫氏の論<sup>10)</sup>があり、近年でも恋の部の構造や配列は様々な視点から論じられている。

現在通説となっている松田氏の論では、主題を同じくする歌群を形成し、全ての歌を歌に読まれた感情内容と表現語句の類似を基準として歌群に分類している。歌群の項目名は仮に附したものであるため確定的なものとはいえず、異なる認識も可能であるとしつつも、歌群によって組織立てられていることを示す点では狂いが無いとしている。だが、分類の正確さや撰者たちが意図して歌群を形成したのかなどといった疑問が生じ、再考の余地がある。本当に全ての歌が歌群に属すると解釈できるだろうか。松田氏の分析を参照しながら古今集の配列について考察していく。

〈つれなき人〉

来む世にもはやなりなむ目につれなき人を昔と思はむ

(五二〇)

つれもなき人を恋ふとて山びこのこたへするまで嘆きつるかな

(五二一)

行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

(五二二)

人を思ふ心はわれにあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

(五二三)

〈夢に見えず〉

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のなき

(五二四)

夢のうちにあひ見むことを頼みつつ暮らせる宵は寝む方もなし

(五二五)

恋ひ死ねとするわざならしむばたまの夜はすがらに夢に見えつ

(五二六)

涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えずぞありける

(五二七)

〈篝火に寄す〉

恋すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

(五二八)

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川に浮きて燃ゆらむ

(五二九)

篝火の影となる身のわびしきはなかれて下に浮きて燃ゆらむ

(五三〇)

〈水に寄す〉

早き瀬にみるめ生ひせばわが袖の涙の川に植ゑましものを

(五三一)

沖辺にも寄らぬ玉藻の波の上に乱れてのみや恋ひわたりなむ

(五三二)

葦鴨の騒ぐ入江の白波の知らずや人をかく恋ひむとは

(五三三)

〈山に寄す〉

人知れぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ

(五三四)

飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ

(五三五)

〈関に寄す〉

逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や恋ひしき音のみなくらむ

(五三六)

逢坂の関に流るる岩清水言はで心に思ひこそすれ

(五三七)

〈知らぬ人〉

浮草の上はしげれる淵なれや深き心を知る人のなき

(五三八)

以上全てが読み人知らず、題知らずの歌で卷一一・恋歌一に収められている。上部のカッコ内は松田氏による歌群の主題である。この一九首の歌を松田氏は七つの歌群に分けているのだが、この分類の仕方にはいくつかの疑問が残る。

まず、分類の根拠に曖昧な箇所がみられる点である。松田氏は五二〇番歌から五二三番歌までを「つれなき人」歌群だとする分類の根拠として次のように述べている。

第一・第二首に「つれなき人」「つれもなき人」とあり、第三首にも「思はぬ人」とある。第四首には単に「人」とあるが、第一・第二・第三首におけると等しく、「つれなき人」或ひは「思はぬ人」と解されるので、「つれなき人」への恋の四首と見てさしつかへないと思はれる

この場合、五二三番歌をこの歌群に分類する理由は、前の三首がそうであったから同様に「人」を「つれなき人」と解し「つれなき人」歌群に分類するというもので、実に消極的な配列の分析である。ここでいう「人」が、前の三首からの連想で「つれなき人」を示すのだという解釈ももちろん可能であるが、次に続く五二四番歌と「まどふ」という語が共通していることに注目すると、むしろ「恋のため」に心が自分のものでなくなり、残されたわが身がまどふ」という五二三番歌と、「恋のために夢の中で心がまどふ」という五二四番歌で対応関係が認められ、この二首で「まどう恋」歌群を形成していると考えられることも可能だろう。実際、松田氏も五二三番歌が二三四番歌に一脈通じるものがあると認めており、五二三番歌は必ずしも「つれなき人」歌群の中に収められるべきではない歌だと考えられる。

これと同じことが「篝火に寄す」歌群にもいえる。この三首が歌群を形成しているという根拠について松田氏は、

第二首と第三首とでは、忍ぶ恋に身を焦がすのを、「篝火」あるひは「篝火の影」に譬へてゐる。第一首の「わが身は影となりにけり」が、第三首の「影となる身」に通じるものと考へると、第一首の「影」も、篝火の影と見なされるので、「篝火に寄す」三首と、認めて差し支へないであらう

と述べている。五二八番歌は後の歌に「篝火」、「篝火の影」が詠まれていることから五二八番歌の「影」を「篝火の影」であると解することが可能だという理由で、この歌群に収められている。だが、『新日本古典文学大系』や『新編日本文学全集』<sup>11)</sup>では「影」を、篝火の影ではなく、影法師のような恋にやつれ瘦せた姿を意味するとしており、ここでの「影」は必ずしも「篝火の影」とは解釈されるべきものではない。配列から歌意を特定することも可能であるのは確かだが、それは全ての歌を歌群に収めるために歌を都合よく解釈してしまいうりスクも伴う。この五二八番歌では、五二九、五三〇番歌のように水に関する表現も無く、「篝火の影」を連想させる歌と解釈することは可能だとしても、「篝火の影」をさす<sup>12)</sup>と解釈してよいかは疑わしい。

次に、松田氏の歌群分類では、歌群を構成する歌の数が大きく異なる点である。五三八番歌は一首のみので「知らぬ人」として分類されている。松田氏は、内容的に類似するのは「深き心を人は知らなむ」とある「山に寄す」歌群の五三三番歌だが、「淵」、「深き心を知る人ぞなき」が一首前（五三七番歌）の「石清水」、「いはで心に思ひこそすれ」に通じるため、この位置に置かれていているとしている。松田氏が恋の部において、一首のみで分類している例は五三八番歌だけではない。恋歌一「春に寄す」、恋歌二「草に寄す」「藻に寄す」「雪に寄す」「夢に見る」「真孤に寄す」「山路に寄す」「弓に寄す」、恋歌三「あひ見る」がその例である。これらの歌は、周辺の歌と何かしらの関係があったとしても、前後の主題を持った歌群に完全に属することはできない歌ということになる。また、恋歌三の「会はずして帰る」、恋歌四の「心変わりを恨む」歌群は恋の部の中

で一番歌数が多い一一首で構成されており、歌群を構成する歌の数が歌群によって大きく異なっていて不自然である。

#### 四

これまで、松田氏の論を確認しながらその疑問点について考察してきた。では、松田氏の論じる構造論・配列論をそのまま採用しないとなると、『古今和歌集』恋の部はどのような構造で配列されているのだろうか。ここでは、歌群を構成しながら配列されているという通説を意識せず、一首一首の歌の対応関係に注目してこの一九首がどのように配列されているか考えていきたい。

五二〇番歌は「来む世」「目の前」「昔」という語を用いて来世・現世・前世をそれぞれ詠みこんでいる点が特徴的な歌で、薄情な思人への思いを詠んでいる。五二二番歌も「山びこのこたへするまで嘆きつるかな」という表現でもって薄情な人を恋い慕ってしまったことに対する嘆きの大きさを詠んでいる。この二首は「つれなき人」・「つれもなき人」がそれぞれ詠まれ、薄情な思人を持ったことへの嘆きの気持ちを詠んでいる点で共通しているため隣同士に配列されたものだと考えられる。この二首に続く五二二番歌は「行く水に数書く」ことよりも「思わぬ人を思ふ」ことの方がはかないことであると対比した歌で、前の二首のように「つれなき」という語句は用いていないものの、「思はぬ人」は自分のことを思わない人を指すと考えられ、「つれもなき人」に準じた表現として五二二番歌の後に配列されたのであろう。

五二三番歌は「心」と「身」をそれぞれ別のものとして捉えて詠んだ歌となっている。このように「身」と「心」を分けて詠む歌は

恋の部以外にも多くみられるが、恋の部ではこの他に恋歌三の三七三番歌と恋歌五の七八七番歌が該当し、しばしば現実には置かれた我が「身」の状態とは裏腹な状態にある「心」が詠まれていたことがわかる。五二三番歌の場合は、「心」は人を思つて「身」とは別々の状態にあり、「身」は恋に思い悩んでどうしたらよいかわからなくなっている。さらに、「知られざるらむ」とあり、「心」が自分の「身」の状態を認識できずにいることを客観的な立場から詠んだ歌であると解すことができる。この歌は、「人を思ふ心」が前歌の「思はぬ人を思う」に通じる表現としてこの位置に配列されたのだと考えられる。

続く五二四番歌は、思いを馳せる場所が遙か遠くになったために恋にまどいながら辿る夢路においても会う人がいないのだろうか、という実際の距離感が夢の中にも反映されたと考えられる歌で、五二三番歌とは「まどふ」の語が共通している。また、次に配列される五二五番歌とは「夢路」と「夢」の語で共通している。しかしながら、五二四番歌は夢を見てもそこで会えず、五二五番歌では「寝む方もなし」とあるように、夢で会いたいと思いつつも眠れずにいることを嘆いた歌であるので、「夢」という語の共通は見られても状況は異なる二首であることがわかる。次に続く二首もまた、「夢」という語が共通して詠まれた歌である。五二六番歌は夢で会いたいと強く思う五二四・五二五番歌とは対照的に、夜の間ずっと恋しい人が夢に現れていることが辛い、と嘆く歌になっている。五二七番歌は、「夢もさだかに見えずぞありける」ということで五二五番歌と同様に夢を見たいのに見られないことを嘆いた歌である。五二四番歌から五二七番歌までの四首は全て「夢」の語が共通しているが、

歌の内容は見た夢について詠む五二四・五二六番歌と、夢を見たいのに思うようにいかないことを詠む五二五・五二七番歌が交互に配列されていることがわかる。

五二八番歌の「影」は二で先述した通り、恋にやつれて瘦せた姿を意味していると考えられる。恋によってやつれてしまったが、同じ「影」だからといって光によって生じる影として恋する人に寄り添うことはない、という「影」という語の特徴を活かした歌であるが、これまで見てきた歌の配列とは異なり、前の歌と明確な共通点が無い。これは五二九番歌にも言えることで、これまでが共通語句によって結びつく配列が続いて一連の流れを保ってきたが、五二八・五二九番歌はこれらとは違った基準で配列されていることがわかる。だが、これらの歌が周辺の歌とは何の関係も無く、突発的にこの場所に置かれたのでは無いことは、周辺の歌の見てみるとはっきりしている。

まず、五二七・五二九・五三一番歌はそれぞれ「涙河」「涙の川」という歌語が詠まれている。ツベタナ・クリステワ氏は、「古今集における「涙川」の歌は八首も〔涙の川〕の二首を含めて）あり、ハ袖の涙Vの他のどの表現よりも登場率が高いことは、「涙川」が歌語として成立し、歌人の注目をあびたことを証明している」と述べている<sup>12</sup>。「涙川」が当時注目された歌語であったとすると、「涙川」を詠んだ歌八首のうち三首が一首隔てて配列されているのは偶然ではなく、撰者が意図して集中的に配列したと考えることができる。また、五二八番歌は「わが身は影となりけり」、五三〇番歌は「影なる身」とあり、「涙川」の歌を隔てる二首もまた、一首隔てて「影」の語が共通し、「我が身」が「影」となるといふ詠み方も類似して

いる。よって、五二七番歌から五三一番歌の五首はそれまでの共通の素材で詠んだ歌を隣同士に配列していく方法とは違った対応関係で成り立ち、「涙河」と「影」が交互に並ぶ配列となっている。もし、撰者が共通語句を持つ歌を隣に置いていく配列にこだわったのなら、涙川が詠まれた三首と篝火を詠んだ二首を、歌群を形成するように配列することができたはずである。

涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えずでありける

(五二七)

早き瀬にみるめ生ひせばわが袖の涙の川に植えましものを

(五三二)

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川に浮きて燃ゆらむ

(五二九)

篝火の影となる身のわびしきはなかれて下に浮きて燃ゆらむ

(五三〇)

恋すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ  
(五二八)

右のように配列すれば、前後の歌が共通の語句を持つという、これまでと同様の配列が可能である。だが、そうしなかったのは、撰者が共通の素材で詠まれた歌を並べる配列や、歌群の形成に重きを置いていなかったからではないだろうか。むしろ、単調な共通語句を持つ歌の連続を避け、あえてこのような複雑な配列を行ったのだと考えられる。

共通、あるいは類似した表現で詠まれた歌を一首隔てて配列する

パターンがあることは石田氏や貫井有紀氏によって既に指摘されているが、ここではそれと同時に、五二九番歌と五三〇番歌がどちらも「篝火」という素材で詠まれており、前後間の対応関係も認められる。よって、五二七番歌から五三一番歌までの五首は、一首隔てた配列が二つ重なり、同時に前後の対応関係も含んだ、複雑な配列となっている。

五三二番歌は「沖辺・玉藻・波」、五三三番歌は「入江・白波」と、水に縁のある語が詠まれている。これは「早き瀬」、「みるめ」が詠まれる五三一番歌にも言えることである。歌の内容はばらばらで、片思いを嘆く歌という他には、特に共通や関連する点は見当たらない。五三一番歌から五三三番歌までの三首は「早き瀬にみるめ生ひせば」という表現を筆頭に、同じ語句の使用は無いが水に縁のある語が共通して詠まれた歌を連続して配列したと考えられる。水の歌三首の後には、水とは無関係の「するがなる富士の山」が詠まれた歌が置かれている。これは、五三三番歌の「知らずや人をかく恋ひむとは」が五三四番歌「人知れぬ思ひをつねにするがなる」に対応し、隣同士に配列されたと考えられる。また、次の五三五番歌は「奥山」という語が詠まれており、山で五三四番歌と対応しており、五三三番歌から五三五番歌は人知れぬ恋心という共通の素材で詠まれた三首になっている。

次に続く五三六番歌は「ゆふつけ鳥」「音のみなくらむ」が五三番歌の「飛ぶ鳥の声」と対応してこの位置に置かれた歌だと考えられる。また、「逢坂」は五三七番歌「逢坂の関」と対応しており、共通の素材の歌を並べる配列が再びなされている。だが、歌の内容は声をあげて泣くという五三六番歌に対し、五三七番歌は「いはで

心に思ひこそすれ」とあり、声にする、しないで正反対のことを詠んだ二首でもある。五三七番歌は五二八番歌と「石清水」の縁で「浮草」・「淵」が詠まれた歌が置かれたと考えられ、この二首は「言はで心に思ひこそすれ」と「深き心を知る人のなき」も心に秘めた思いついという点で対応している。

以上、一九首が周辺の歌とどのような対応関係をもつて配列されているかを見てきた。

それぞれの歌は周辺の歌と、歌に詠まれる語句や詠まれる心情など、何かしらの関係を持って配列されている。共通語句を有する歌を前後に並べる配列が多く、部分的には複雑で変則的な、一首を隔てた配列や、水に縁のある語が集中的に配列される例も見られる。その配列の結果として、松田氏が述べるような類歌による歌群を形成することがあるが、それは全ての歌に言えることではなく、あくまで部分的に、先述のような配列の性質上、類歌が集中配列されて歌群を形成するのである。

歌の内容は、全首が恋に嘆く歌という点で共通点している。前後で歌の内容が似通っている場合も多いが、前後で同じ言葉を用いても内容は異なることもあって一貫性はない。恋の部の構造は、恋愛の巻が進むごとに恋愛が進展すると述べたが、恋歌一に配列された歌が内容に一貫性の無いことを踏まえると、巻の中に収められている歌自体は、一直線上の恋愛の軸・時間軸で進行するわけではないことがわかる。

恋歌一の配列は、恋愛初期の恋に嘆く歌を、使用語句などの表現や歌意に対応関係のある歌を隣り合わせに配列することを大きな流れの軸としつつ、単調な共通語句を持つ歌の連続を避けるように、

あえて複雑で変則的な配列も行つたのだと考えられる。

## 五

これまで、『古今和歌集』恋の部の構造と配列について考察してきた。今回扱った箇所は恋の部のごく一部であるので、ここから恋の部や恋歌一の構造全体を論じることは難しい。だが、構造の一部をなす箇所を徹視的に見ることで、繊細な巻や歌の対応関係が浮き彫りになってくる。各巻は恋愛が段階的に進行するよう役割を担って並び、各巻に収められた歌は、一首一首が孤立しないように、周辺の歌と何かしらの対応関係を持って配列されている。また、対応関係の連続という大きな流れの中でも、時には単調な配列を避ける配列や、当時注目されていた歌語の集中配列も見られ、この作品を単調なものにすまいとする撰者の意図が窺える。撰者は『古今和歌集』を秀でた歌の寄せ集めに留めず、構造や配列に様々な工夫をすることによって一つの作品として成立させたのである。

## 引用文献

『古今和歌集』本文 高田祐彦訳注『新版古今和歌集』（角川学芸出版 二〇〇九年六月）

注(1) 久曾神昇『古今和歌集成立論 研究編』（風間書房 一九六一年）

(2) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房 一九八〇年）

(3) 新井栄蔵氏、吉川栄治氏、鈴木宏子氏、宇佐美昭徳氏など

(4) 新井栄蔵『古今和歌集恋部の部立小考』（『国語国文』四六六 京都

大学文学部国語国文学研究室編 一九七四年六月）

- (5) 鈴木宏子『古今和歌集表現論』(笠間書院 二〇〇六年)
- (6) 吉川栄治『古今集』恋部構造私見』(『国文学研究』七四 早稲田国文学研究会 一九八一年六月)
- (7) 片桐洋一『古今和歌集の研究』(明治書院 一九九一年一月)
- (8) 石田穰二『古今和歌集卷十一恋一卷頭部管見』(『和歌文学新論』明治書院 一九八二年五月)
- (9) 奥村恒哉『古今集の研究』(臨川書店 一九八〇年)
- 佐藤和喜『恋』の特色と構造』(一冊の講座 古今和歌集』有精堂出版一九八七年二月)
- (10) 小沢正夫『アンソロジーとしての古今集』(『国語と国文学』東京大学国語国文学会編 一九八二年二月)
- (11) 小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系 古今和歌集』(岩波書店 一九八九年)
- 小沢正夫・松田成徳『新編日本古典文学全集 古今和歌集』(小学館 一九九四年)
- (12) ツベタナ・クリステワ『涙の詩学』(名古屋大学出版会 二〇〇一年三月)
- (13) (8)に同じ
- 貫井有紀『古今和歌集』恋』の排列―表現論的視点から』(『中京文学』一五 一九九六年三月)

## 受贈雑誌(一)

愛知教育大学大学院国語研究	愛知教育大学国語教室
愛知県立大学説林	愛知県立大学国文学会
愛知淑徳大学国語国文	愛知淑徳大学国文学会
愛知大学国文学	愛知大学国文学会
青山語文	青山学院大学日本文学会
歌子	実践女子短期大学日本語コミュニティケーション学科
宇大国語論究	宇都宮大学国語教育学会
愛媛国文研究	愛媛県高等学校教育研究会国語部会
愛媛国文と教育	愛媛大学教育学部国語国文学会
大阪大谷大学大学院日本文学論	大阪大谷大学大学院文学研究科
叢	
大妻国文	大妻女子大学国文学会
大妻女子大学紀要	大妻女子大学
大妻女子大学草稿・テキスト研究	大妻女子大学草稿・テキスト研究
大妻女子大学大学院文学研究科	大妻女子大学大学院文学研究科
論集	
岡大文論稿	岡山大学文学部国語国文学研究室
お茶の水女子大学国文	お茶の水女子大学国語国文学会